

## インタビュー

## 古代エジプトの知を現在に

東日本国際大学学長・早稲田大学名誉教授 吉村 作治

## はじめに

本号の特集のテーマである「食品に関する知財」に関連する文献を調べていたところ、ロマンを感じさせる特許公報（特許第4963560<sup>※1</sup>号公報）にたどり着きました。テーマは、古代エジプトで原料として使用されていたエンマー小麦を用いたビールの製造方法！しかも、発明者には考古学者として有名な吉村作治先生が名を連ねていらっしゃいます。これは是非とも直接お話をお伺させていただきたいと思いインタビューをお願いしたところ、ご多忙な中にもかかわらず、快くお引き受けくださいました。

インタビューは、古代エジプトのビール製法の再現にはじまり、特許公報に記載のプロジェクトに至る経緯や、プロジェクトで御苦労された点、また、研究に対する吉村先生の姿勢など、考古学ファンでなくとも惹きつけられる内容になっております。また、改めて視野を広く持つことの重要性を再確認させて頂いたようにも感じられます。それでは、御一読下さい。

**編集部** 吉村先生、今日の話題となっているこのビール、お召あがりになっていらっしゃるのですか。

**吉村先生** もちろん飲むよ。



**編集部** ここに三種類ございますが、どれが一番お好みですか。

**吉村先生** いや、特にないですね。

**編集部** 私も、頂きましたが、どれも非常にしっかりした味で、とても美味しかったです。

**編集部** こちらのビールのネーミングとデザインに吉村先生がかかわられたと伺いましたが。

**吉村先生** そうそう、ブルーナイルとホワイトナイ

ル。ナイル川の支流の名前です。ハルツームのところで合流していますよ。ホワイトナイルとブルーナイルというのは、現実にあるから。エジプトの水は、全部ナイル川の水だからというんで、そういう名前をつけてみました。でもこの3本目のルビー、これは僕がつけたんじゃないよ。

**編集部** ラベルのデザインも、ブルーナイルとホワイトナイルとで、右目と左目で分けられていますよね。

**吉村先生** 古代のホルスの目を元にしたデザインです。ホルスというのは古代エジプトの神様で、右目と左目が違うんですよ。ホワイトナイルとブルーナイルはそれぞれ右と左にして、ナイル川の右と左に分れている。

## ※1

【特許番号】特許第4963560号

【登録日】平成24年4月6日

【発明の名称】発酵麦芽飲料及びその製造方法

【請求項の数】3

【出願日】平成18年3月28日

【特許権者】

国立大学法人京都大学

学校法人早稲田大学

黄桜株式会社

【発明者】

伏木 亨

河原 太八

吉村 作治

若井 芳則

**編集部** 先生ご自身でデザインされたのですか。

**吉村先生** 僕、そういうのに対して一切口出さないから。デザインの専門家にお任せ。

**吉村先生** それが一番いいんですよ。その道の人を信用し、尊重しないと生きていけないですから。

**編集部** 門外漢がいろいろ言っても必ずしもいいものができることはない、ということですね。

**吉村先生** そうそう。デザイナーってやっぱりすごいですよ。僕は、専門職というのを非常に尊敬し、尊重しているんです。専門のことについては口を挟まないで、吸収させてもらう。

**編集部** なるほど、ところで、このビール、元々キリンビールさんの創立100周年記念事業で、エジプトの壁画に描かれていた古代のビールの製法を復元しようというお話が発端だそうですね。

**吉村先生** 壁画に描かれているビールを復元するんじゃないなくて、古代エジプトのビールを復元しよう。その資料として壁画を使ったの。壁画に描かれているからやったんじゃないですよ。

**吉村先生** 古代エジプトビールというのはそもそもどのようなものであるか解らなくて、とにかくビールの発祥だからやってみようというのを、その100周年のときにキリンビールが発想したの。

**吉村先生** それについては、その昔、キリンビールの知人が、ギリシャ人の言った古代エジプトのビールをつくってみようよと言ってきたんですよ。僕が大学生をやめて助手クラスのとときに。当時は仕事が中々無くて暇を持て余してたから、キリンビールの人が、何か仕事くれようとしたんです。でも、何回やっても失敗するわけ。どれも酸っぱくなっちゃうわけです。でも、とにかく、一応これがギリシャ人の言った古代エジプトのビールだというんで、試してみたんです。でも、これが評判悪かったんですね。

**編集部** 酸っぱい失敗品ですね。

**吉村先生** そう。どうして失敗したかという、その時は考古学者だけでやっていたから失敗したの。100周年のときは、醸造学の先生と一緒に研究したから、上手くいったんですよ。醸造学の立場から壁画を視て。壁画は全部で三十幾つあったんだけど、僕が、古王国と中王国と新王国<sup>※2</sup>の典型的な壁画を3つ選んで、醸造学の先生にチェックしてもらったら、これはまさしくビールを作る基本が描かれているってことで。

**吉村先生** だけど、ビールの作り方がそれぞれの壁画

に必ずしもきちっとは描かれていない。どこか欠けてたりなんかして。

**吉村先生** たかが3000年だから、3つの時代のどれもビールのつくり方は同じだろうと思ったら、実は古王国、中王国、新王国ごとに違っていた。ただ、そこまで細かくやってもということで、古王国でやろうかということで決めて。で、古代エジプトのビールの作り方を復元して、それが今回は見事にでき上がって。

**編集部** ついに成功されたのですね。

**吉村先生** そう。そのときは、道具も全部現地のエジプトでつくったんですよ。

**編集部** 道具というと、ビールを製造する設備ですか。

**吉村先生** そうそう。ビールを作る道具。古代のビールを作る道具を、壁画から全部読み取って。その道具をエジプトで再現して、エジプトから職人も日本に呼んで、それでキリンビールの中に製造ラインを作って、原料のパンもつくって。

**編集部** 国を跨いだ壮大なプロジェクトだったんですね。

**吉村先生** そう。それで飛行機で再現した道具を運んだんですよ。現地の運び方が乱暴で、壊れたりなんかしたから、道具をもう1回空輸したりで大変だったんです。

**編集部** そういうトラブルもあったんですね。

**吉村先生** そうやって、ビールを昔の道具でつくったの。

**編集部** とことん再現にこだわられたんですね。

**吉村先生** そう、パン焼き窯までつくったんだ。パン焼き窯の日乾レンガ、焼きレンガも、全て現地で焼いて運んできて、こっちで組み立てたよ。

**編集部** えっ、レンガまで現地で作ったんですか。

**吉村先生** やっぱり現地の土じゃなきゃいけない。

**編集部** 現地の職人さんも呼び寄せたとのことですが、現代のエジプトには、古代ビールの作り方について伝承されているものはあるのですか。

**吉村先生** 全然ないですよ。全くないです。ただ、今でもイスラムだからお酒飲まないんだけど、エジプトにはコプトってキリスト教徒がいるんですよ。その人たちが飲むどぶろくみたいなビールはあるんですよ。そういうビールは工場というより家庭で作られてい

※2

(注釈)

古王国時代：紀元前27世紀～紀元前22世紀、中王国時代：紀元前21世紀～紀元前18世紀、新王国時代：紀元前1567～1085年

る。そこにキリンビールの醸造学の専門家に行ってもらって、全部調べてもらって、これは古代のビールのつくり方だということになった。

要するに、醸造酒はどんなものでも、最初どろどろなんですよ。それをどうやって澄ますか。日本酒だってそうですよ。どぶろくから清酒にすることで透き通るようになるでしょう。ビールもそうなんです。元はどろどろしているのね。今は、ろ過する機械があるけど、昔はそれをどういうふうにしたか。泥で澄ませたかとか、木炭使った、炭を使ったかとか、いろいろやって実験を重ねて、そういう試行錯誤を重ねるんですよ。そうやって、100周年のプロジェクトが無事に終わって、僕も、完成してよかったってなりました。その成果を、キリンビールは醸造学会で発表して、僕は国際エジプト学会<sup>\*3</sup>で発表して、それで一度終了したわけ。

**吉村先生** その後しばらくして、古代エジプトと同じようにエンマー小麦<sup>\*4</sup>を使おうという話がわいてきたんですよ。100周年のプロジェクトでは普通的小麦を使っていたんだけど、古代エジプトビールと同じエンマー小麦で作ろうって話ね。それで、エンマー小麦を探してみたら、京都大学にあるというんです。

**編集部** そこで京大の出番ですね。吉村先生が多くの人脈をお持ちだったからこそ、いろんな人がつながってくるんですね。

**吉村先生** 人脈は持っていたというか、むしろ作ったんだね。僕は変わっているから、あいつオカシイよとか言って変わった人が僕を好いてくれるんですよ。だって、ビールの話なんか、失敗したにもかかわらずリベンジしようなんて、普通、言ってくれないよね。僕なんかすっかり忘れていた。

**吉村先生** それで、京都大学に行ってみたらエンマー小麦がビーカーに入ってたの。「すみません、いただけますか」って頼んだところ、「いや、うちもそんなにないからね、17粒か20粒ぐらいしかないですよ」って渋られて、「半分ください！そのかわり、10倍にし

※3  
(注釈)  
エジプト学会国際協会(IAE)

※4  
(注釈)  
古代エジプトでは、現在殆ど栽培されていない栽培二粒系の1品種であるエンマー小麦を用いてビールを製造していたことが知られている(特許第4963560号公報)

て返します。」とって何とか手に入れた。それで、ここまでできたからにはやるか、となって、キリンビールが栃木県の農場で栽培を進めた。一生懸命やると、結構みんな乗ってくれるんですよ。

**編集部** そのエンマー小麦は発芽させずに、ずっと保存していたものだったんですか。

**吉村先生** そうそう。

**編集部** お墓の中とか遺跡から見つかったものではなくてですか。

**吉村先生** 違う、違う。京都大学って不思議な大学で、いろんな所を野外調査していて、そのときにエンマー小麦も収集してたんですよ。現代のものですよ。



栽培されたエンマー小麦—キリンビール復原プロジェクト—

**吉村先生** そのエンマー小麦を農学部が持っていたんですよ。エンマー小麦を10粒もらって鉢植えにして、キリンビールが育てたんですよ。僕も見に行きましたけど、1粒で1つの鉢植えで芽が出てくるかどうかなんていう状況から、温室で育てて1年で1トンになった。普通、小麦って1年に1回しか収穫しないでしょう。でもそのときは温室で、1年に何回も実がなる。必死にやって1トンまで増やして、一応、京都大学には1キロ返したんです。

**編集部** 10粒で1000倍返しぐらいですよ。

**吉村先生** そうそう。そうしたら、京都大学が、エンマー小麦使ってみようかという話になって。京都大学の当時の尾池総長がすごく意欲的な人で、エンマー小麦を使ってビールやりましょうよってキリンビールに話を持っていったらしいの。でも、キリンビールは、商業的には採算とれないからやりませんと。そこで、京都大学は、今度は話を黄桜に持って行ったわけ。

**吉村先生** 黄桜は以前、地ビールをやってみたことがあったので、製造機械が余っていたんですよ。それで、京都大学が黄桜に話を持って行って、京都大学が食堂で売るからというんで、黄桜が乗ったわけですよ。

**編集部** 有効活用ですね。

**吉村先生** そう、有効活用だから、とってもいいと思って。

**編集部** そういう裏話もあったんですね、このビールには。

**吉村先生** だけど、ここで古代エジプトの製法で作ると、絶対にコストが合わないんですよ。だから、エンマー小麦を使って製造するということだけに特化したんです。だから製法は現代のもの。しかも、そうじゃないと、「ビール」という名称を使えないから。

**吉村先生** 今のビールというのは、澄ますのにコーンスターチを使ったり、それから香り付けにホップを使っているでしょう。古代エジプトにはホップはないですからね。現代で、「ビール」という名前をつけるためには、酒税法があって、こういうものがビールって決められているんですよ。その法律に沿ったものだから「ビール」という名前と呼べる。

**編集部** この出願の明細書の中でも、課題として、エンマー小麦を使って現在の製造方法でいかに作るかというのがテーマになっていました。

**吉村先生** そうです。古代にあったエジプトビールは酒税法上のビールって言えないから、いわゆる雑酒ですね。

**編集部** なるほど。

**編集部** 古代の製造方法だと、いわゆるどぶろくが出来るんですね。

**吉村先生** そう、どぶろくになるんです。だから、古代エジプトビールも、最初はどぶろくなんですよ。どぶろくだからストローで吸ってたんですよ。

**編集部** 古代エジプトでは、そういう飲み方だったんですか。

**吉村先生** 飲み方がね。だけど、途中から違う。結局、澄むようにする方法のところは壁画になかったんですけど、醸造学の人、おそらく炭を使っただろうと。

**編集部** 一応、古代エジプトでは、どぶろくのまま飲んでた時期もあったんですね。

**吉村先生** 最初はね。それで澄むように、ろ過して。そうしないと沢山飲めないじゃない。おかゆみたいだと。

**編集部** 確かに、どぶろくだとぐびぐびと沢山飲

むのに、大変ですよ。

**吉村先生** ぐびぐびと飲んだかどうかというのは分からないけど、冷蔵庫がないので保存の問題があるから、古代エジプトでは、どぶろくのほうがいいような気もしないではない。

**編集部** ところで、古代からビールがあったというのは、それは壁画からわかった事実なんですか。

**吉村先生** 壁画もあるし文書もあるよ。

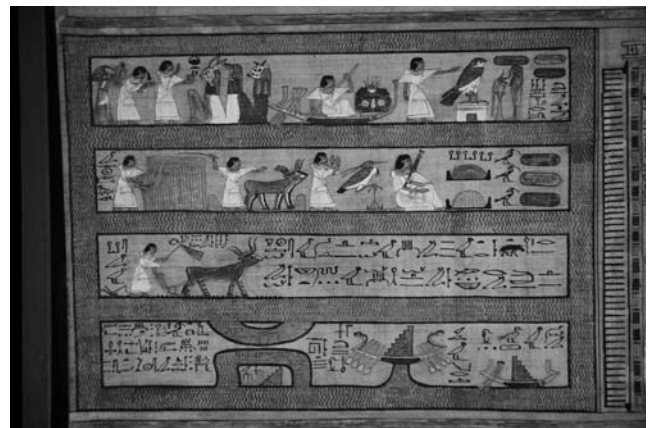
**編集部** 文書ですか。

**吉村先生** ヘカという名前です。

**編集部** ヘカって何ですか。

**吉村先生** 古代エジプトでのビールの名前ですよ。

**吉村先生** また、パピルスだけじゃなくて、神殿の壁画とかレリーフとかにもいっぱい描いてある。パピルスって高いものですから、そんな雑多なことは書かない。パピルスには教条的なことしか書かないんで。



農耕の図（大英博物館蔵）

**編集部** 壁画のほうがパピルスより低いコストで絵を残すことができるんですね。

**吉村先生** それはそうでしょう。壁画って、お墓にある漆喰の壁に絵を描くんだから。コストって考え方はないですよ。簡単につくれるかどうかでも壁画は都合いい。パピルスって、そもそもパピルスを作らなくちゃいけないですから。

**編集部** 紙をすくところからですか。

**吉村先生** すかない。

**吉村先生** 張りつけるんです。すき紙は中国。すき紙がエジプトのパピルスを凌駕して、エジプトは衰退しちゃったの。パピルスの製法は、パピルスという草を細くはいて、それをメッシュにおいて、上から石を、重しとして載せる。水分が抜けるとパピルス同士が張

りつくでしょう。それがパピルスという紙なんです。パピルスというのは、草のパピルス、紙のパピルス、そこに描かれた絵もパピルス。みんなパピルスという名前。

**編集部** 全て、パピルスと呼ぶんですね。

**吉村先生** そう。古代エジプト人がどういう風にビールを飲んだかというのは、ギリシャ人が伝えているんだ。古代エジプトのビールというのは、パンを使って作っている。パンの中にある酵母菌を使うというんだけど、醸造学の人言うにはね、パンを焼いたら、酵母菌はみんな死んじゃうから、パンの中にある酵母菌を使うなんてあり得ない。そこがポイントなの。

どこにも書かれていなかったんだけど、壁画にあったんだよ。スターターには大体ナツメヤシの実かブドウを使うんです。ブドウというのは、ブドウの実と皮があるでしょう。ブドウの実と皮の間に発酵菌がいるんですよ。それを使う。それをスターターというんですけど、それが増殖する。増殖するときの発酵菌の餌がパンなんだ。そういうのを世界で初めて、醸造学の人が見つけたの。

それまでは、雑菌を使うというふうに言われてたんだけど、壁画の中に、途中で、つぼを焼いている図があるんですよ。これについては、ビールを作る時間に暇だからつぼを焼いて、でき上がったビールを入れるための容器を用意しているんだらうという具合にみんな解釈していた、ギリシャ人も含めて。実は、全然違って、つぼに入れているビールを発酵させるためには、ビールの内側にいる要らない雑菌を殺しておかないといけない。それで焼いていた。そういうことが、醸造学の人だから解明できた。

**編集部** 要するに、滅菌工程があったわけですね。

**吉村先生** そうそう、滅菌工程があったの。そういうのを見事に解明できた。それまで、パンをふやかして、そのパンに包まれている発酵菌が増殖すると言って試していた。それで、いくら実験しても失敗するんですよ。

**編集部** 無駄な雑菌が多いからですね。

**吉村先生** そう、雑菌が多すぎて、みんな腐って酸っぱくなっちゃう。ワインなんか酸っぱくなっちゃうでしょう、あれは滅菌していないから。でも、今のワインはあまり酸っぱくならないでしょう、ちゃんと滅菌していますからね。

**編集部** 確かに。そうですね。

**吉村先生** そうというのが解らなかつたんだけど、その醸造学の人に参加することによって解った。考古学者って、学問の中のゼネコンみたいなもので、何でもやるんですよ。何でもやるということは、実は何も解らないということ。僕はこの何も解らないということをよく理解しているから、全部その道のプロと組んで共同で研究する。それで、僕は知識とかデータとか、そういうのを彼ら専門家に全部出す。向こうは、例えばビールだったら発酵学というのかあって、ビールだけじゃなくお酒を作るときの工程とか、そういうのを全部知っているわけでしょう。僕、何も知らないわけでしょう。そういうその道の基本的なゼネラルな理論というのを知っている専門家と、僕みたいにエジプトの専門家が組むと、ちゃんとしたものが解明できる。



**編集部** 手間がかかりますが、わくわくするような時間ですね。

**吉村先生** そうそう。

**編集部** パズルが1つ1つ解けていくような。

**編集部** それぞれが知識を補い合うことによってですね。

**吉村先生** そう、それが、面白いの。だから、建築だって、建築の人と組まなきゃ絶対ダメなの。でも、考古学者は勝手に建築のことを言うことが多い。だから、本当の事は解らなくなる。絵画もそうです。全て、そういう専門家と組まないとは解明できない。考古学者というのはコーディネーターみたいなもので、こういうデータがあるか？これこれはあるか？とか。それらが組み合わせあって、新たな知識になる。

考古学というのは、知識研究だからね。僕だって、エジプトの古代の、時代を古代にしたエジプトの研究

なんです。そこにはいっぱいいろんなものが出てくるでしょう。それを解明していくには、全部その道の、例えばファッションならファッションの専門家と組まないでファッションについても解らないわけ。僕はデザイナーじゃないから、見て、フレアとかそういうのはわかりますよ。でも、どう作ったのかとか詳しくは解らないわけ。だから、ファッションデザイナーと組んで研究する。

全て生活に関係しているものは考古学ですから、そういう風に進めていかないと、みんなどこかで必ず頭打ちになっちゃうのね。僕がどんどん突き進めるのは、プロと組むから。

**編集部** その道の技術の専門家と協力して解明するんですね。

**吉村先生** そうそう、組めば、例えばビールならビールについて勉強する時間が必要ないでしょう。向こうは死ぬほどビールの勉強をしてきている。そういう専門家と組むのがいい。向こうはエジプトのことを全然知らないわけよ。だからエジプトのことについて質問に答える。そうすると、自分の持っている技術と理論と合わせて、あ、こうなるという風に謎が解明されていくんですね。ところで、そういうこと自体が、もう発明だと思うんだけど、そういうのはまだ日本では見かけない。

**編集部** どうでしょうね。そのビジネスモデルを発明と呼べるかどうか。

**編集部** その考古学でいろいろ謎を解明していくのには、現代の科学技術が不可欠だということですよ。

**吉村先生** そうそう、そうです。

**編集部** それをうまく生かしていくコーディネーターが考古学者なんだと。

**吉村先生** そうです、簡単に言うと。

**吉村先生** 僕は、知財のこととか全く知らないんですよ。京都大学が申請して、特許をとって、お金になった。僕は、古代ビールを復元することだけしかやっていないから、研究のどの部分が発明になっているか、詳しくはわからないんです。

**編集部** でも、この特許公報を拝読させていただいて、今お話を伺っていると、全体に亘って発明にとっても貢献されていると思います。

**吉村先生** そう？

**編集部** はい。

**吉村先生** 京都大学の人も、麦の専門家で、ビールの

専門家でも古代エジプトの専門家でもない、おかしいよね。

**編集部** でも、異分野のコラボレーションで、こんなおいしいビールが開発できたということですよ。

**吉村先生** そうそう、おいしい。

**吉村先生** でも、実際につくった古代の道具でつくったのは、もっとうまい。

**編集部** そうなんですか。ろ過前のどぶろく状のビールですか。

**吉村先生** もちろんろ過して。

**編集部** 古代の再現品でろ過したものですね。

**吉村先生** そう。再現品は度数が13%で、この商品のビールは6%ぐらいです。

**編集部** アルコール度数、普通のビールと比べると高いですね。

**吉村先生** 再現品は13%なので、ワインと同じくらい。要するに、白ワインです、簡単に言うと。ビールはろ過すると白ワインみたいになる。しかも白ワインよりおいしい。

**編集部** とてもおいしいんですね。

**吉村先生** うん。麦ですからね。ワインはブドウですから。だから、そういう面で、古代のビールを飲んだら古代の勝ちという感じ。ただ、もう作れないですよ。酒税法の規制とか絡むんで難しいんですよ。テレビで番組を作成しようと思ったって、そこをまず乗り越えないといけない。税金やら、テレビ局のスタジオの環境やらね。それでいて、一切関係ない人は飲ませないとか。いろいろ難しい。

**編集部** それは大変ですね。

**吉村先生** しかも、税金がかかってくる。

**編集部** テレビ番組の企画でお酒を作るだけでも、酒税法が問題になるんですね。

**吉村先生** だから、キリンビールはその場所を3年とか5年間で、全部国税局の許可取って、その許可取った場所でしか作らないと言ってやっていた。それを、せっかくキリンビールが開発できたんだから宣伝しよう、僕、テレビ局でコネがあるところに電話して、「どう、やらない？」って聞いたら、みんな、「やる、やる。」って言って。でも、いざやるとなると、酒税法の規制があるのでダメになった。フリーゾーンの範囲内だけしか作れないとか何とかややこしいことを言うから、テレビ番組の制作はやめよう。

**編集部** しかし、100周年企画で、古代のビール製

法でできましたよという、それでもう1つの大成果ですよね。

吉村先生 そうそう。

編集部 一つのテーマの完了だったのですね。

吉村先生 だから、完成時はマスコミも呼んで、例のフリーズのところで飲んだ。飲んで酔った状態で外に出ても大丈夫ですかと、くだらないことを冗談で聞きましたよ。

編集部 酔いが醒めるまでゾーンから出てはいけないのかみたいなご質問ですか。

吉村先生 そうそう。よくわからないけど、厄介な規制ですよね。いいじゃない、みんな楽しければ。

編集部 ところで、このビールの話の中で、そもそも小麦として、今の小麦じゃなくてエンマー小麦を使っていたというのがわかったのは、どうしてですか。

吉村先生 エンマー小麦というのは、ずっと前からビールに使われていたことが解っているんですよ。エジプトには、昔はエンマー小麦しかなかったんです。

編集部 それは、ギリシャ人が解き明かした中にも、そういうことがあったんですか？

吉村先生 もちろん。古代ギリシャもエンマー小麦。古代はみんなエンマー小麦ですよ。エンマー小麦と今の小麦の大きな違いは、背丈です。背丈が高いのがエンマー小麦。だから、台風とかそういうのに弱い。一度、キリンビールが栃木の農場で栽培したとき、すごくすくすく伸びた。だけど、台風が来て全部だめになった。だから、1年かけて台風が来ても大丈夫なようにカバーして、2年目は大成功。背が高い種類はだめだね。

編集部 背が高い種類は栽培に向いていないのですね。

吉村先生 栽培に向いていないの。だけど、昔はそれしかないから、品種改良して背丈を短くして強くして、それから実りも多くして。そこで、実りを多くするといいと思うけど、土地からその分栄養分を吸収していくわけですね。だから、たくさん実れば、実るほど不味くなるに決まっている。

編集部 味が薄まるみたいなことになるんですかね。

吉村先生 そうそう。

編集部 栄養分が薄くなって。実ごとに分散してしまうということですか。

吉村先生 その通り。だから、たくさん実らないような小麦をつくらなきゃいけない。これが、結構大変なんですよ。

編集部 1粒1粒に味が凝縮するような。

吉村先生 そうそう。そういう麦で作るからおいしいんだよね。現代では、みんな薄い味の麦でつくっている。しょうがないんだよね。ところで、パンビールというのは、パンのみから作るんじゃなくて、パンは酵母菌の餌なの。そういうのが目からウロコだよ。でも、ギリシャ人は、エジプトのビールはパンビールと思った。つまり、パンを原料としてつくっているって。でもパンは原料じゃなくて、酵母菌の餌だったんですよ。それは醸造学の人が、そうだと指摘した。それで見事に解明したんです。

編集部 壁画から読み解かれたビール工程として、先ほど、殺菌工程というのをお伺いしましたけど、ほかにも、この壁画から読み解かれた工程というのは何かあるんですか。

吉村先生 壁画には、ビールの製法が全部順番に描かれているんですよ、漫画のコマみたいに。そのとおりにやっていけば、それが今のビールの工程に合っているので、読み解く必要はなかった。ただ、どうしても解らなかつたのが、つぼを焼いているところだった。

編集部 先ほどお伺いしたつぼを焼く殺菌工程ですね。

吉村先生 そうそう。解らないでしょう。解らないから皆がそれぞれに勝手なことを想像するんだ。

編集部 どれも仮説だったりするのですね。

吉村先生 その仮説もみんな丸め込まれて、1000年も経つと、もう仮説じゃなくなって絶対のようになっている。

吉村先生 例えばピラミッドは王の墓であるなんて、ギリシャ人がつくった発想ですから。どこにもそんな根拠はないし、ミイラもなければ何もないんだけど、みんなそう思っているでしょう。あれはギリシャ人が勝手に、あれは何だろう、偉大な王だから、あれが墓だろうみたいな、そういういいかげんな気持ちで決めたことが、そのまま伝わっている。

編集部 なるほど。先ほどのつぼの話も、そういういい加減に解釈されていたのを、先生が醸造学の専門家とタッグを組まれて正解を導かれたのですね。

吉村先生 壁画には必要なことしか描かれていない。なぜって、古代エジプトで、お墓の中に描くということは、後世の我々に伝えようという気はないんですよ。神様に伝えることを考えていたから、きちっと描かないと、あの世に連れていかれちゃうと考えたわけ。だから、正確に描く。つまり、描かれたものは全

部正しいんですよ。

壁画で太陽の船というのが2隻見つかったんだけど、ヨーロッパでは、昼の船と夜の船と考えたんですよ。2隻あるから昼と夜という発想にみんな納得しちゃったんですよ。でも、太陽の船には太陽神が乗っている。なのに、夜ってあります？太陽なんだから両方昼だよ。僕は昼と夜なんかあり得ないと考えて、2隻の船は、この世の船とあの世の船で、どこかで乗りかえるんだという仮説を考えただ。

**編集部** 2隻を乗り継ぐんですね。

**吉村先生** そうなると次は、乗り継ぎはどこだっかって考えて、見事に謎が解けたんだ。壁画を基に発掘を進めて、第2の太陽の船というのが発掘できた。今まで第1の太陽の船でオールだと言われたものが8mもあって、8mのオールなんてどう考えても漕げないですよ。2人でも3人でも無理です。そもそも、船の幅が8mしかないのに、オールが8mだったら漕げないでしょう。だから変だと思っていた。そしたら、ちゃんと第2の船で3mのオールを見つけた。そして、結論的に言うと、ヒンジっていうオールを引っかけの金具がちゃんと発掘されて、その後も帆柱が発掘されたりと、他の部品とつながるいろいろな部品が発掘されてね。そうやって分かったのは、第2の船と呼ばれる西側の方の船は、動力船だった。第1の船と呼ばれる方は、王様や神様が乗る客船。そういう風に謎が解けたんだよ。

**編集部** 見事な謎解きですね。

**吉村先生** こういう謎解きは、考古学者だけじゃだめなんです。これも船舶の専門家とやらなきゃ上手くいきません。

**編集部** 今度は船舶の専門家の出番なんですね。

**吉村先生** そうそう。大学の船舶の研究者に協力してもらったの。それで、船というのは、動力がないと動きませんよって言われた。そうでしょう。船って動力がないと進まないよね。その動力というのは、水の流れもあるし風の流れもあるでしょう。帆で進むとか、漕いで進むとか、とにかく動力がないと船は動かない。動かない船は船じゃなくて単なる漂流物だね。当たり前なことだけど、そういうことを船舶の専門家が言うんですよ。それじゃ、その証拠を見つけましょうってことになって、調査すると見事に見つかったんですよ。その道の専門家と一緒にいると楽しいんですよ。だから、僕の友達には、科学者が多いんです。

理系の人って、本当に面白い。例えば船舶の専門家だったら船のことは何でも知っているんですが、他のこととなると不思議なくらい何も知らない。専門家って、そういうものなんだね。僕ら考古学者は何でも広く知ってなきゃいけない。でも、深くは知らないわけ。だから、そういう専門家の人と協力することも大事なの。

動力船が存在したはずだという考えから、第2の船が第1の船を引っ張るんじゃないかという仮説に至りました。太陽みたいに東から西に進むのなら先頭に立っているのが動力船のはずだという確信をもって調査すると、漕ぐオールが見つかって、帆柱が見つかって、帆も見つかって、第1の船を引っ張る縄も見つかったと、次々に仮説通りのものが発掘された。そうして証拠が揃って動力船ということが確定された。



**編集部** 仮説どおりに次々と証拠が見つかっていく時は、わくわくされましたか。

**吉村先生** 面白いんですよ。しかも、偶然見つけるというよりは、確信して探し出すんです。考えていくと、どんどん広がっていくんです。例えば、縄を見つけよう、縄を探せって感じです。

**編集部** あるはずだと確信して探すんですね。

**吉村先生** そうそう。帆柱があるに違いない、だから、帆柱を探せと。帆柱を入れる穴があるはずだし、オールだってオールを受けとめるヒンジがなきゃいけない。発掘されたものをこれは何だろうなと後から考えるんじゃなくて、先に確信して後から見つけていくわけ。

**編集部** なるほど。従来の考古学は必ずしもそうじゃなかったんですね。



**吉村先生** 考古学って、いにしえの人たちの行動や思想を考える学問なんですけど、考古学者は何も考えていなかったりする。考えないといけないのに考えないんだから考古学って変ですよ。考えずにいっぱい新しい発見して、どんどん論文書いて、どんどん発表しているから、あたかも神秘性があるように見えるんですよ。

**編集部** それに対して、動力船のお話のように、まず原理から考えて、ここに正解があるだろうということからさかのぼるというアプローチは、吉村先生はどういう風にして身につけられたんですか。

**吉村先生** 生まれつき。好奇心だよ。

**編集部** そうなんですね。

**吉村先生** 発想がちょっと普通の人と違って、船を見て、この船は何だろうじゃなくて、この船はどうやって動いているんだろうという点に興味がわくんです。

**編集部** エンジニアリングの発想ですよ。

**吉村先生** 僕は理科系ですから。

**編集部** たしかそうですね。先生は工学博士でもいらっしゃいますよね。御専門はどの分野ですか。

**吉村先生** 船舶です。実は、工学だけじゃないんだけど、工学博士のほうが格好いいじゃない。

**編集部** 確かに解りやすいですね。

**吉村先生** ねえ、解りやすいでしょう。それで、早稲田大学の理工学部申請したんです。そうしたら、「文学部が何を言うか」って、5年間受け付けてくれなかったね。

でも、根気良く、そこを何とか、ぜひ論文を読んでくださいとお願いして、やっと、読んでくれる先生を見つけたの。そしたら、その先生が、おもしろいよ、君。これ、いけるよってことになって、それで工学博士になったの。

**編集部** 船舶に関する研究がテーマだったんですか。

**吉村先生** 船舶というか、太陽の船がテーマだったね。壁画に描かれた太陽の船が実際に使われたか使われなかったかとか、どういう構造になっているとか、なぜ2隻あるかとか、何で空を飛ぶかとか、いろんな素朴な疑問をテーマに研究した。空を飛ぶんだら水の上で動かさなくてもいいでしょうと考えたりした。僕は船の素人だから船舶の素人なりの疑問が出てくるんですよ。そういった素人の疑問を解決していく過程で船舶の専門家と話していると、僕もいつの間にか、船舶の専門家になっちゃうんです。

例えば、ミイラを見つけたときも、人間の体のこと知らないとなら研究が進まないでしょう。そこで、形質人類学の人をコンコンと叩いて、「実はミイラを見つけた」って訪ねるんです。でも「あ、そう、僕、ミイラ嫌い」とか言われるんですけどね。そこを何とか説得して現地に連れて行って一緒に研究を進めます。3年もすれば、僕もインターンよりか人間の体に詳しくなったよ。

**編集部** ミイラの研究のために、形質人類学まで突き詰められたんですね。

**吉村先生** だって、ミイラを解体していくとき、これが心臓だとか、これが胃だぞとか、動脈がどうだとか聞きながらやるから、医学の勉強なんです。ずっと模型で勉強するインターンよりも実地の学問だから理解が進むよね。実際にそこに死体があるわけだから。医学博士も取れるぐらい。

**編集部** 解剖学的な知識が身につくんですね。

**吉村先生** そう解剖学ですよ。簡単に言うとな。

**編集部** そうなんですね。素人目には、考古学というと、ロマンを追う学問だなと漠然と考えていたんですけど、そうじゃない側面もあるんですね。

**吉村先生** ロマンというのは、大きくて何か解らないことを解明するというロマンなんですよ。だけど、そんなロマンなんかどこか置いておいてやらないと研究は進まない。

**編集部** 研究なされている1つ1つは、非常に実学的なことなんですね。

**吉村先生** 僕は、これまで、何年から何年はミイラを研究した、何年から何年は建築を研究した、という感じでいろんなことをたくさんやっているから、百科事典みたいなものだよね。

**編集部** そうですね。ところで、エジプトを研究の対象にされたのは、何かきっかけはあったんですか。

**吉村先生** きっかけは、子供のときに僕は背が低かったし成績もいいし生意気な口聞くから、背の高いやつにバットでぶん殴られたりして追いかけ回されたりと、いじめられっ子だったんです。だけど、いじめっ子というのは、絶対に図書室に来ないんですよ。僕が図書室に入っちゃうと帰っちゃうんです。それで、いじめっ子が帰るまで図書室にずっといていろんなものを読んだ。まず百科事典を読んだ。百科事典っておもしろいんですよ。次から次へ、解らないことが解ってくるわけ。百科事典を大体読んじゃったら、伝記を

読んだね。伝記に載る人ってすごくユニークなことをやって、世界的に認められて、なおかつ晩節を汚していないんです。晩節を汚すと伝記にならない。この人達を真似すれば絶対世界一になると思った。

でも、エジソンみたいに世界一になるには道が遠いと感じた。100冊あった全集の最後の10冊がリビングストーンなどの冒険探検家の伝記だったんです。でも、マラリアになったとか虫に食われたとか、怖い話がいっぱい書いてあって、嫌だなと思った。最後の3人だけが考古学者だった。そのうちの一番最後、100冊目が、エジプトのツタンカーメン王を見つけたハワード・カーターって人の伝記だった。あ、これならいけそうだなと思ったよ。なぜかという、虫とか蛇とか嫌だけど、死人相手だったら化けて出るぐらいだからね。

それで、それから考古学を勉強しようと思ったけど、当時は全然資料がなかったんですよ。仕方がないから、美術全集とかいうのを読んで過ごして、そして大学に入ったときに研究を始めたの。だから、考古学のきっかけは10歳のときです。

**編集部** 10歳のときに考古学に出会われたということですね。

**吉村先生** そして20歳のときから本格的に始めたから、その後の10年間は、いろんな苦労があった。英語は大嫌いだったけど原書を読むしかなかったんです。仕方がないから、文法からもう1回やり直した。そうして英語の本を読むようになったから、英語に困らないようになった。英語が好きで英語が上手いんじゃないで、英語が大嫌いで、しかし自分の学問にとって必要だからやるようになった。

**編集部** 必要に迫られて、身についたわけですね。

**吉村先生** そうです。今となってはどんな英語でも全然嫌じゃないの。みんな、英語の本を読むのは嫌いでしょ。

**編集部** はい。抵抗がありますね。

**吉村先生** 僕は全然嫌いじゃないの。考古学の謎を1個1個解明するというシンプルな目的のために読めばいいというだけで、抵抗は感じない。今では、アラビア語とフランス語と英語と日本語等、謎を解明するためにいろんな文献を読んでもね。

**編集部** 全て必要に迫られて身についたわけですね。その源になるのが、好奇心ということなんですね。

**吉村先生** ところで特許なんて、僕は全く関係ないと

思っていたのね。でも、ライセンス料をもらうようになってから、特許ってすごいなって。特許取るためには僕の頭の中を開示するわけでしょう。ということは、ライセンス料を払えば、僕の頭の中のことを誰でもできるんですよ。特許取らなければ教えないで済むじゃないという考えがあったの、僕にはね。でも、お金もらったら、やっぱり特許取ったほうがいいと思った。お金、欲しいですよ。

**編集部** 研究のためにですか。

**吉村先生** うん、そうそう。だって、50年で、今年で51年目になるんだけど、研究に100億円使いましたよ。

**編集部** すごい研究費ですね。

**吉村先生** そう、研究費。幾ら使ったかを文科省に登録しなきゃいけない。そうこうしてるうちに100億。財形貯蓄にしていれば、今ごろ御殿に住んでいた。惜しいことしたな。でも、全部いろんなもので残ってるんです。本300冊と論文2000本。

**編集部** 論文2000本ですか。それは、すごいことですね。

**吉村先生** ほとんど、3日に1本ぐらい書いている。論文も、普通の文も同じ論調。みんな論文だと格好つけて難しい言葉を使うんだけど、僕はそうじゃない。やさしい論文を書く。どうしてかという、やさしいと関係ない人も読んでくれる。難しいと、関係ない人は読んでくれないんですよ。論文なんて仲間うちでいくら読んでもしょうがないの。関係ない人が読んでくれて、理解してくれることが大事でしょう。それで、文体をやさしくするの。子供でもわかるような文。ところが、みんな、格好つけるんですよ。

**編集部** 確かにそうですね。

**吉村先生** そういうのをやっても広まらないんですよ。僕、この間、クラウドファンディングでお金集めた。2000万円の予定が、3300万円集まった。500人の人が応援してくれた。その500人の人の内、知っているのは100人ぐらいなんですよ。400人は知らない人。その人たちがお金をくれた。そういうふうには、何でも一生懸命ひたむきにやると、人を動かせるんだよね。だから、特許で儲けた利益も全部研究費に。まず、京都大学と早稲田で折半して。それを早稲田大学が半分取って、残りの半分が僕のところに。でも、結構な金額ですよ、1年間に、3回か4回に分けてくる。それを全部研究所に入れちゃう。僕のところには入ってこない。そういう身ぎれいというのが大事なんだよ。

大事なのは、理解してもらおうのじゃなく、共感してもらわなきゃ。人はみんな、理解させよう、理解させようって、自分の考えを理解してもらおうと思うでしょう。それではだめなんです。理解なんかされなくても構わないんですよ、共感してもらったほうがいいんです。

**編集部** 行動に賛同できるというわけですね。

**吉村先生** そうそう。

**編集部** 他の人にも共感していただいて、それで一緒に研究をしてという感じで、さらに新しいものを世の中に送り出して行ってらっしゃるという。すごい仕事ですね。

**編集部** ところで、話は変わりますが、エジプト時代に、現代の商標みたいなものはあったのですか。

**吉村先生** ないです。

**吉村先生** 商売というのがない、そもそもビジネスというのがないから。物を動かすだけです。古代エジプトの王家の紋章はロゼットという紋章が使われていた。いわゆる日本でいう菊の御紋章ね。でも、王家の紋章って、お墓でそういうのを描いているというだけ。

**編集部** 王家ご用達ということですか。

**吉村先生** そういう考え方もない。知財という考え方がないんです。

**編集部** ブランド的なものもないんですか。

**吉村先生** 全くないです。だから、ミイラを作る人というのは決まっている。ミイラ師は、お父さんがミイラ師なら子供もミイラ師、そういうふうにして、1つのギルドみたいなものです。

**編集部** 商売で競合するようなことはないですか。どこのミイラ師がいいかとかで、王家がどこを選ぶかとか。

**吉村先生** 王家には王家所属のミイラ師がいるし、王家所属の医者があるし、王家所属の畑もあるし、ミツバチも、王家一本槍です。だから、選ぶんじゃなくて、全て王家の所有物です。

**編集部** 専属がついている感じですね。

**吉村先生** そう。

**編集部** 庶民の間での競合はないんですか。

**吉村先生** 庶民なんてないんですよ。

**編集部** そうなんですか。王家以外はどういう層になるんですか。

**吉村先生** 王家はいるけども、その下に貴族というのがある。貴族は土地を持っていますが、それも王様が

ら譲り受けた土地で、そこに、手工業者がいて、商業をやっているお店があるけど、その店もすべて王家の持ち物なんです。だから、発注して入札して、というようなことは全くない。すべて王家の持ち物だから、商業的な考え方が全くないし、知財もない。

**編集部** そういえば、知財といえば、先ほど特許が役に立っているとお伺いしましたが、何か発明に関して御興味をお持ちになられたこととかございますか。

**吉村先生** それがないんですよ。新しいものを作ろうという気はない。今回の特許も、自分では、これが発明品になるなんて全く考えていなかったし、学問的な興味だけでやっていたでしょう。

**編集部** あと、最後の質問として、現代では、人間の創作的な活動を駆逐するような技術が、例えば人工知能などのいろいろと新しい技術が出てきています。それを危惧する風潮もありますが、考古学のご研究をずっとされているお立場からどのようにお考えですか。

**吉村先生** 技術者というのは、何を言ってもやめないんですよ。勝手にやるんですよ。勝手にやらしておけばいいけども、人工知能なんて進歩すると、人間がいなくなる。それでいいんですか。僕が生きているうちは大丈夫かもしれないけど、それでいいんですかという、そういう疑問はあります。だから、自動車も、いろんなセーフティガードはいいよ。だけど、運転しなくてよくなっちゃう。そうしたら、運転手がいなくなっちゃうじゃない。自動車が勝手に行けばいいという。前に手塚治虫先生とね、エジプト漫画をつくらうというので2人で作成していたんですけど、手塚先生が一番心配していたのは、ロボットが考えてロボットが人間のようにになったら、人間がいなくなるよね。そういう意味では、僕もあんまり好きじゃない、先端技術というのは。

絶えず、そういった配慮のもとに先端技術を使っていかないと、人間が必要なくなる。地球上にあるのは、鉱物と動物、植物でしょう。動物から人間が出て、人間圏というのをつくって、人間が人間として生きているでしょう。そうすると、当然、ロボット圏というのが出てきて、人工知能、そういう新しい圏ができる。そうすると、人間が絶滅危惧種になるだろうという、そういう心配。僕の生きている間はないと思うんだけど、手塚先生も心配していた。手塚先生、本当に心配して、そういう漫画も描いている。ロボットが人間を使うようになると。しかし、先端技術というのは面白

い。非常に矛盾しているんだけど、面白いけど怖い、そういう感覚。

**編集部** 考古学者として、それを避けるためのアドバイスとかございますか。

**吉村先生** 避けようがないと思います。避けられないと。科学者というか、ああいう人たちは、止めろといっても止めない。新しいものを創り出すことに生きがいを持っているから。生きがいは止められないじゃない。僕は考古学をやっているでしょう、これも誰も止められない。

**編集部** エジプト時代の技術のように、人間が使ってなんぼの技術であってほしいですね、技術というのは。

**吉村先生** ほんとうにそう。例えば、今、王様の墓を探しているんですけど、そのときにはGPRという電磁波の地中レーダーね、探査レーダーを使っているんです。これについてはその技術者の報告を大切にしているんですよ。そんな感じで、人間が必要な技術を、こういう技術が欲しいねというんで、それを一生懸命創っていくというのが大事な。だけど、今は、技術が先走って、必要じゃないものがどんどん出てきている。それで、人間は後から、それをどうやって扱おうかということになる。その違いですよ。だから、おっしゃるとおりで、人間が必要なものを創るのを技術というんで、科学技術を利用しているのが科学技術というんだけど、今、科学技術が勝手に進んでいって、人間がどうやって使おうかって、後で考えている。スマホなんか全くそうでしょう。電話だけでいいのに、

いろんな機能を入れる。アプリケーションとかね。

**編集部** 確かに使っていないアプリケーション、たくさんあります。

**吉村先生** 無駄ですよ。そういうことで、現代の科学技術の一番の問題点は、頼まないことを勝手にやっていること。

**編集部** 人間が欲しないことまで、どんどん提供されてしまうということですね。

**吉村先生** ほんとうにそうなの。必要なことだけやってくれればいいんだけど、そうじゃない。だって、人間が死ななくなったらどうするんですか。僕みたいなくそじじいがいっぱい溢れるんですよ。たまらないですよ。死ぬからいいんだよ、人間というのは。

**編集部** 限りあるからこそですね。

**吉村先生** そうそう。そのために何歳までに生きていたとしたら、こういうことしようとか。いつまでも生きられたら、のんびんだらりとだけで終わっちゃうよ。でも、だめなんだね、科学者たちは。絶対に誰が押さえても押さえきれない。

**編集部** ところで、誠に残念ですが、時間が参りました。

**編集部** 今日はお忙しい中、貴重なお時間を割いていただきまして、ありがとうございました。

**吉村先生** どうもありがとうございました。

**編集部** 興味深いお話を、どうもありがとうございました。

**編集部** 今日は、本当にありがとうございました。

